

## トマト黄化葉巻病

### 1 病原の特徴

- (1) トマト黄化葉巻病は、ウイルスが原因で起こる病気で、埼玉県内では平成 17 年に初めて確認されました。
- (2) 病原ウイルスは、トマト黄化葉巻ウイルス (*Tomato yellow leaf curl virus*: TYLCV) で、タバコナジラミ類により媒介されるジェミニウイルス科 (Geminiviridae)、ベゴモウイルス属 (Begomovirus) に分類されます。
- (3) 本ウイルスの自然感染による症状が確認されている栽培作物は、トマト、ミニトマト、トルコギキョウです。
- 注: タバコナジラミ類とは、シルバーリーフコナジラミ(またはタバコナジラミバイオタイプ B)とタバコナジラミバイオタイプ Q の両種をさします。

### 2 被害の様子

発病初期は新葉が葉縁から退緑しながら葉巻症状となり、後に葉脈間が黄化し縮葉となります。病勢が進行すると、頂部が叢生し株全体が萎縮します。なお、発病前に着果した果実は正常に発育しますが、発病後は開花しても結実しないことが多くなります。また、タバコナジラミ類の多発時には、本病によらず着色異常果も発生します。



写真 1 発病株



写真 2 発病株(その 2)



写真 3 発病株(その 3)

### 3 発生について

本病はタバコナジラミ類(シルバーリーフコナジラミ及びタバコナジラミ バイオタイプ Q)によってのみ媒介されます。トマト(ミニトマトを含む)からトマトへの伝染が最も重要な伝染経路と考えられていて、ほ場、野生生え及び家庭菜園の感染トマトの株が感染源と考えられます。成虫及び幼虫が、感染株を吸汁することで保毒虫となり、約 1 日の潜伏期間を経た後、死ぬまでウイルスを伝搬し続けます。感染株に産卵され育ったタバコナジラミは約 1 ヶ月後まで感染能力をもちます。また、汁液(接触)伝染、種子伝染及び経卵伝染はしないと考えられています



写真4 感染源となる野良生エトマト



写真5 タバコナジラミ類成虫



写真6 タバコナジラミ類幼虫

## 4 防除適期と防除方法

防除にあたっては、タバコナジラミ類を

- ① ハウス内へ「**入れない**」、② ハウス内で「**増やさない**」、③ ハウスの外へ「**出さない(死滅させる)**」の3つの対策が重要です。

### (1) 耕種的防除

ア 本ほには無病苗を定植します。

イ 施設栽培では、ハウス(特に育苗ハウス)の開口部には、目合い0.4mm以下の防虫ネットを張り、タバコナジラミ類の侵入を防ぎます。また、UVカットフィルム、反射資材等も利用します。

ウ ほ場及び周辺に防草シートを設置し、ハウス周辺の野良生エトマトは伝染源となるので除去します。

エ 施設内には栽培作物以外の植物を持ち込まない。

オ 発生前から黄色粘着テープを設置し、タバコナジラミ類の早期発見と初期防除に努めます。

カ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取りビニール袋等に入れて、完全に枯れるまで密閉処理してから処分します。

キ 施設での栽培終了後には、トマトの地際部を切断後、ハウスを密閉して蒸し込みを行います。

### (2) 薬剤防除

ア 同一系統薬剤の連用は、薬剤に抵抗性を持ったタバコナジラミ類を生じさせるので避ける。農薬の使用は必要最小限とし、耕種的防除を基本とします。

イ 液剤散布に当たっては、葉裏に十分液剤がかかるようにします。

#### 薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県